

周年史制作に関するヒアリング <質問用紙>

公立大学法人横浜市立大学

～ヒアリングの実施にあたって～

このヒアリングは、『横浜市立大学百年史』編纂のための基礎資料とさせていただくために実施するものです。ご記載いただいた内容は、百年史制作の貴重な資料として活用させていただくとともに、百年史のデジタルアーカイブに掲載させていただく場合があります。

上記にご同意いただける場合は、右欄にチェック（✓）をお願いいたします。



同意の有無を確認させていただくため、こちらの用紙はご回答ともにご返送いただきますようお願いいたします。

五嶋良郎 様（医学研究科 教授）

お伺いしたい内容

「生命医科学研究科設置（平成 25＝2013 年）」について

■質問項目

1. 上記の出来事について、その経緯や当時の大学の状況はどのようなものでしたか。

生命医科学コース、研究科の設置は、第二期中期計画の一環として、検討され、実施された本学開設以来の初めての学部間連携の取り組みの1つである。構造生物学を主な領域とする大学院のみの生体超分子専攻と、大学院医学研究科の数名の教員とのハイブリッドを形成し、分子、細胞、組織、個体レベルの基礎生物学から医学応用までの広範囲の課題に取り組む人材を育成するという方向性を打ち出した。長年、大学院のみであった生体超分子専攻が、このハイブリッドによって学部教育をも担うという体制が確立した。当時の研究科長、西村善文教授とは、具体案については、様々な議論になることが多かったが、基本理念については一致しており、幸いこの構想の実現に至ることができた。生命医科学研究科は、開設以来、すでに多くの卒業生も輩出している。現在は、この取り組みの課題と今後の展望を全学的な

視点で見据えることが重要な時期と思われる。

2. 上記の出来事を進められる上で、特に印象に残ってらっしゃること（良いこと・悪いことどちらでも）はどのようなことですか。ご苦労されたこと等についてもご記載ください。

生体超分子専攻と医学研究科とは良きにつけ悪きにつけ、研究体制やバックグラウンドの相違から来るとされるカルチャーの相違があり、前提をすり合わせることに苦労があったように思う。また、最も苦労した点は、一定の期間内に生命医科学の理念を実現するのに最もふさわしい医学群所属の教員を確保することであった。生体超分子専攻の取りまとめは西村教授、医学研究科は私が取りまとめることになった。その上で、主に二人が相談しつつ全体の構成、相補的な関係、分野などの観点を踏まえながら、候補を絞り込んだ。そして最終的には、各学群調整会議に持ち帰り、審議の末、決定するという手順を踏んだ。この前段階では、候補となる教員をリストアップしつつ、個別に候補となる教員に説明に回った。予算や具体的なことが決まらない状況での説得は難航し、最後には、理念に共感してもらえる教員に一人ずつ粘り強く説得して回ったが、声をかけて候補としてのリストアップに承服してもらった教員の方々には、最後まで、納得のいく条件を提示することができず、大変申し訳なく思っている。加えて、当初の候補の中には、他大学へ教授として転出された教員もあり、一方では、その欠員を埋める必要があり、当時は戸惑いと焦り募り、このままでは医学研究科教員の人員枠を確保できず大きな労力と時間を費やした。しかし、このことはある程度予想済みで、候補者が、他大学へ引き抜かれるような優秀な教員であったことの証左であり、内心安堵した面もあった。もしかしたら、単年度計画の縛りから、将来計画を時間をかけて検討する余裕がないということからくる公立大学に共通する課題によるところが大きかったかもしれない。鶴見キャンパスも含め、特に医学群から加わってくれた各教員諸氏には、前人未至な、ある意味で先の見えない道筋であったにもかかわらず、この生命医科学の目指す理念に共鳴し、今まで獅子奮迅の努力を傾注いただいたことに深く感謝したい。

3. 上記の出来事による、その後の本学への影響・効果はどのようなものとお考えですか。

この医理連携により、以前に比べれば、学部間の垣根は低くなったのではないかと。その後もデータサイエンス学部の設置もその現れと考えられる。しかし、学部学生を中心に考える視点と、各学部、大学院の教員の求める共同・協調関係の確立にはまだいくつかの課題があると思われる。これには複数の要因があり、部分的な改善では解決は困難であろう。より突っ込んだ本音の議論、常日頃の信頼関係に基づくコミュニケーションの場を求めて行くことが重要と考える。そして何より、本学の中長期的なビジョンの中で、独自の色彩、強み、戦略を描き、英知を集めてその妥当性の有無について議論を尽くすことが重要である。

4. 本学の特色、良いと思われる部分、または気になる部分をご記載ください。

横浜市立大学は、他大学にはない有利な点と、同時に不利な点があり、これが特色を形作る基盤になっている。教員はこれらの点についてより広く、深く理解する姿勢が求められる。そのための1つの方法は、全学で1つの機関誌を持つことも一考に値する。そこに

様々な年齢層、経験者の知恵を集積する場を形成する事である。また組織改革は一朝一夕にはできない。何がボトルネックとなっているか、今、注力すべき点は何かをヘッドクォーターは常に考え、設置者や関連組織との意思疎通をとって行く必要があると考えられる。

5. その他、上記の出来事や本学のことについて、ご自由にご記載ください。

大学は、学生、教員の枠を超えて自由に意見を発言、交換するところである。そこから創造的な活動が生まれる。しかし、一方で、様々な会議は、様々な要素を集約し、具体的なアクションプランを決めて選択、実行して行くことが求められる。そのためには、教員とともに、職員のキャリアアップをさらに向上させて行く必要がある。何より、組織への愛着と情熱が欠かせない。そのためには、職員・教員の垣根を超え、一体感を醸成することが何より重要と考える。

※ 最後に、未来の横浜市立大学を担う学生・教職員にぜひメッセージをお願いします。様々な事を経験する中で自分の中にそれらが積み上がり、大きく深い知恵となって行くような正しい方法で自分の道を焦らず着実に歩いてほしい。

ヒアリングの項目は以上です。ご協力ありがとうございました。

<問い合わせ先>

横浜市立大学学務・教務部学術情報課
(百年史編集部会事務局)

電話: 045-787-2076 FAX: 045-787-2079

Email: hyakunen@yokohama-cu.ac.jp